

## 「統合的な知」による身体体験

マインド中心のパラダイムを超えた、私・他者・世界の気づきの深化

Sensing the Body by “Integral Ways of Knowing”

Moving Beyond Cognicentrism: the Approaches for Deep Awareness of Oneself, Others and the World

吉嶋かおり

YOSHIJIMA Kaori

リラクゼーションスペース蓮

(Relaxation space REN)

Keywords: integral ways of knowing, embodied interactive meditations, sensory awareness

「私」の存在の体験のされかた、「私」と「他者」、「世界」の関わりの体験のされかた、そして、これらについて探究する際のアプローチは、対人援助の背景、あるいは基礎をなす興味深いテーマである。本発表は、これらのテーマについて、発表者の一体験をもとに考察した。

本発表は、発表者が大学院在学中と大学院修了後に受けた、自分のからだを主体的に体験するワークを行った後の描画とレポートを用いて比較考察した。どちらもワークも、呼吸、動き、触れるといった基本的な身体体験における気づきを深めていくものであることは共通しているが、修了後に受けたワークは Interactive Embodied Meditation (IEM、相互的身体瞑想)と呼ばれている。これら一連のワークを通して、からだにおける気づきの深化がどのように起こっているかを追うとともに、その背景にあるからだ観・からだ体験について考察することで、統合的アプローチの一現象を示すことを目的とした。

IEM とは、さまざまな人間的次元に独特なかたちで埋め込まれている潜在的な洞察や智慧の声に「深く聴き入る」ことができるようにし、「統合的な知 (integral ways of knowing)」を促すものである。「知る」という営みから身体性を排除せず、人間のすべての次元をふくみ、それらが同様に探究の過程に貢献するような知のあり方、これが「統合的な知」である。

在学中のワークの描画から見出されたのは、自分のからだを対象としてとらえていること、自分のからだは外界と明確に分け隔てられていること、からだやからだの体験はかたちをもって表され、それは状況説明的な言語表現であること、からだを mind (マインド、意識) でのみ体験し

ていること、そしてそのために、体験は言語と一体化しているということであった。つまり「客観的なからだ」である。これは、認知中心主義 cognicentrism の社会において形成された身体観が色濃く現れていたためと考えられる。

一方、修了後のワーク (IEM) は、「主観的なからだ」体験の描画であった。それは、曖昧で明確、具体的で抽象的という一見相反するものが現れ、かたがちがなく、「私」を感じながらその明確さがなく、自分と他者が融合的にも独立的にも体験され、イメージや感情も含む全てであった。これらは、体験が言語になる以前のものが現れている。

自己、状況、他者、世界などへの気づきが深化することは、援助者自身の主体の在り方、一人称としての援助者に求められる体験として重要であるとともに、被援助者へのアプローチとして用いる可能性もあるだろう。また「統合的な知」は、認知中心主義の世界において、学びのアプローチや研究方法論の転換をもたらし、よりホリスティックな知識の構築や多元的な知による拡張された認識論に貢献する。

文献：

Ferrer, J. N., Romero, M. T., & Albareda, R. V., (2005). Integral Transformative Education: A Participatory Proposal. *Journal of Transformative Education*, 3, 4, 306-330

Osterhold, H. M., Rubiano, E. H., & Nicol, D. (2007). Rekindling the Fire of Transformative Education: A Participatory Case Study. *Journal of Transformative Education*, 5, 3, 221-245